

東京の小学校と海外の日本人学校が連携して、日本の蚕「小石丸」を飼育。日本の産業・文化・歴史を学びながらお互いの、友好関係を築いていく「小石丸プロジェクト」の一回目の繰糸が八月十九日、長野県下諏訪の松澤製糸所(松澤清典社長)で行われました。

当日は仲田小、杉並第十小、月島第一小、啓明学園初等学校の校長先生、担当の先生とUAEアブダビ日本人学校から木村雄一先生の総勢十六人が「TO KYO UAE友好シルクツアー」として参加。

同製糸所には伊勢神宮に奉納する小石丸も扱っており、先生たちは専門の養蚕農家が育てた小石丸の繭と比較して「外見は一緒でも繭の硬さが全然違う。糸の量は専門の繭の方が断然」と繰糸機に生糸が次々と巻き取られていく様子を熱心に写真やビデオで撮影していました。

同製糸所の松澤社長は「専門の養蚕農家は蚕に沢山桑の葉を与えています。二学期は養蚕農家に負けないくらい立派な小石丸を愛情たっぷり育ててください」と子どもたちにメッセージを送ってくれました。

海外との連携を楽しみにしている各校の子供たち

群馬県桐生市の生地工場を見学。子どもたちが育てた小石丸の生糸は同工場で生地になりUAEに届けられるため、先生たちは熱心に聞いていました。特にコンピュータ化したデザイン工程では、普段でははけつて見学の出来ない説明に沢山の質問が出るなど関心の高さを感じ取れると同時に、同工場が使用する生糸がほとんど中国産と聞いて日本のシルク事情にあらためて落胆する一幕も。



参加校の先生が製糸工場を見学

仲田小の沼田校長先生と杉並第十小の山口校長先生は「蚕糸試験場の跡地校として積極的に養蚕を盛り上げたい」と意欲的。月島第一小の荒川校長先生は「都心は緑が無い中、農園を作るなど都会ながらに自然を作り、子どもたちの良い経験にしたい」と話しています。

二学期から参加する啓明学園初等学校の北原前校長先生は「海外との新しい試みとして素晴らしい企画。ぜひ子どもたちをバックアップしていきたい」と話し、三年生を担当する結城先生も「本校には帰国生が1/3おり、国際交流に力を入れていきたい」と話していました。



アブダビ日本人学校の木村先生も大いに期待

UAEから参加した木村先生は「一学期は初めての経験と高温多湿、室内の乾燥など、あらゆる悪条件の中、試行錯誤しましたが残念な結果に。それでも子どもたちは前向きで、二学期こそは繭まで育てていこうと話しています。日本の子どもたちとの今までない交流を楽しみにしています」と挨拶。木村先生には、二学期に各校から向け多くの質問が各校の先生たちから出ていました。



子供たちが育てた小石丸がいよいよ生糸に